

〔書評〕

根本みなみ著

『家からみる江戸大名』 毛利家―萩藩

林 亮太

一

本書は、吉川弘文館から刊行中のシリーズ「家からみる江戸大名」の一冊で、萩藩毛利家をテーマにしたものである。著者の根本氏には、すでに萩藩毛利家の「御家」「家」についての著作があり、このシリーズの執筆者として適任であるといえる。本書を読めば、「家」を軸にした毛利家の通史を知ることができる。目次は次の通りである。

プロローグ 毛利家の二百年

- 一 中世から近世へ―毛利元就・隆元・輝元・秀就
- 二 揺れる幕藩関係・同族関係―毛利綱広・吉就・吉広
- 三 血筋の入れ替わり―毛利吉元・宗広
- 四 元就の子孫として―毛利重就
- 五 有力者に支えられる家―毛利治親・斉房
- 六 將軍家の「御縁辺」として―毛利斉熙・斉元・斉広
- 七 「御威光」の立て直しと「元就公ノ御血統へ立帰り」―毛利敬親・定広

エピローグ 近世大名としての毛利家

このように、七つの章にわけて萩藩毛利家の「家」について、通時的に論じている。本書のねらいはプロローグに、「毛利家の「家」の歴史について（中略）、「家」の存続を目指す数々の取り組み、平たく言えば、徳川政権下の一員として、鎌倉時代以来の歴史を持つ名家として、分家に対する本家として、萩藩毛利家がいかに江戸時代を生き抜いたのかという視点からみていく」（二頁）とある。紙幅の都合上、一部の内容についてはふれられないが、以下で簡単に内容を紹介していく。

一章では、元就―初代藩主秀就期について論じる。毛利氏は、鎌倉幕府の重臣大江広元の四男季光から始まる。季光の本拠地が相模国毛利荘であったことから、「毛利」を称するようになった。毛利氏は、三浦合戦で季光の四男経光を除き、多くが討ち死にしていまい、毛利荘の地頭職を奪われたが、越後国佐橋荘と安芸国吉田荘の地頭職を保証された。

その後、建武三年（一三三六）に時親（経光の四男）は、本拠地を安芸国に移した。

大永三年（一五二三）、元就が毛利家本家の家督を相続した。元就期の弘治年間末から永祿年間において毛利家は、大内・尼子といった有力大名の間にあった安芸国の一人領主から中国十カ国とも呼ばれる広大な領地を治める大名へと変化した。こうして元就は、大名毛利家の基盤を確立した存在として崇敬され、近世を通じて「太祖」と位置づけられていた。

元就の跡を相続した隆元は、『寛永諸家系図伝』には毛利家の当主と

して記載されていない。これは、隠居した元就が影響力を持ち続けるなかで元就に先立って死去し、その位置づけが不明確なものになったことに起因するという。

隆元の死後、輝元の成長に伴い、元就は隠居の意向を示すが、輝元は元就の後見がなくなることに対して反対した。それをうけ、元就は叔父の吉川元春、小早川隆景、毛利氏庶子家の福原貞俊、口羽通良が輝元を補佐する体制をつくった。関ヶ原の合戦を経て、慶長五年（一六〇〇）には毛利家に対し、周防・長門二カ国への減封が命じられ、輝元は出家したが、その後も実質的な当主として秀就の後見をおこないながら、毛利家の運営にあたった。

初代藩主秀就については、結城秀康の娘龍昌院（喜佐姫）との縁組を説明し、この縁組により毛利家は松平の称号を下賜され、秀就は少将に昇進したと指摘する。少将への昇進は、これ以降の藩主の目標になったという。

そのほか、本章では萩藩毛利家の「家」を語る際に欠かすことができない分家の長府藩毛利家・徳山藩毛利家・清末藩毛利家（三末家）の成り立ちについて、輝元・秀就の動向とともに述べている。

二章では、二代藩主綱広〜四代藩主吉広期について論じる。秀就の跡を継いだのは、その子で当時十三歳の綱広であった。慶安四年（一六五二）からの三回の国目付派遣を乗り切り、その後、綱広は福井藩松平家の松平忠昌の娘千姫を正室に迎え、徳川家との関係をより強固にしていた。綱広期には、藩政の制度の基盤が整備された。幕府法や元就以来の毛利家中で定められた法をもとにした、「当家制法条々」が定め

られたのもこの時期である。同法の特徴は、随所に元就以来の家法の順守を求めている点である。そのほか綱広による特筆すべき政策として、秀就がおこなった知行地の二割の上知を中止する、二歩減の中止がある。これには困窮する家臣を救済することで、幼年で相続した綱広の権威を高める目的があった。こうした功績があるが、後年の史料での綱広の評価は高くなく、病気がちで引きこもっていたと書かれており、実際、幕府向きの役目・家臣団向きの役目双方を綱広の名代として子の吉就がおこなっていた。綱広は多病のため官位昇進が遅く、少将への昇進はかなわなかった。また、続く吉就・吉広はともに早世したため、彼らが少将昇進の先例を途絶えさせたという認識が後代に引き継がれた。

この章では三末家とは異なり、大名ではなく萩藩毛利家の家臣として位置づけられた岩国吉川家についても、その経緯を説明している。そのほか、毛利家の分家家臣である一門六家の来歴についても詳述している。六家の席次、六家に次ぐ家格の準一門二家、六家が就任した加判役・当職・当役を説明するほか、六家の三丘六戸家・大野毛利家・右田毛利家・厚狭毛利家と萩藩毛利家との関係を役職・養子・家紋などから論じており、ここで各家の特徴が理解できる。

三章では、五代藩主吉元・六代藩主宗広期について論じる。宝永四年（一七〇七）、四代藩主吉広が死去し、その跡を相続したのが長府藩主綱元の嫡男吉元であった。長府藩初代藩主秀元（元就の四男元清の子）のひ孫である吉元が、萩藩毛利家の家督を相続したということは、輝元から続いた血筋が秀元系統の血筋にかわったことを意味するという。

吉元は、藩校の明倫館の設立など文教政策に力を入れていたが、当時

の評価は高くなく、末家出身であることを気にかけており、それが行動にあらわれていたとされる。また、後年毛利家が幕府に提出した由緒書には、末家出身の吉元が相続したことにより、同家の家格が低下したと書かれていた。こうした出自を吉元は強く意識しており、それが分家の徳山藩毛利家との論争（万役山事件）にも影響していた。このほか、吉元期に展開した岩国吉川家の家格上昇運動、それに反対した吉元の主張なども論じている。吉川家の家格上昇運動は、当然、末家や一門らとの比較により展開したため、対立・論争にもつながったという。

吉元の跡を継いだ宗広は、初入国した年から西日本をおそった虫害に対応し、慣例だった「御国廻」（領内巡見）を中止した。その後、徹底した儉約を命じるなかで「御国廻」は実施された。宗広は、家臣に対しては威厳を示し、領民に対しては仁政を施した藩主として評価されているという。また、文教政策にも熱心で、書物の編纂などがおこなわれた。ただ、綱広以降がなわなかつた官位昇進については、行動を起こすも実現せず、それは次代へ続く問題となった。

四章では、まず七代藩主毛利重就の経歴について、毛利匡敬として十六年間長府藩主であったが、萩藩主宗広が死去したことで、仮養子となっていた匡敬が同家を相続したと説明する。相続後、宗広の遺志が重就の後継者問題を複雑にした。宗広には男子はいなかったが、娘（誠姫）と懷妊中の側室がいた。宗広の遺志により、側室が男子を生めば、同人を重就の後継者とする、女子が生まれれば宗広の娘誠姫に替養子を迎えること、とされていた。結局男子は誕生しなかったため、誠姫に替を迎えることになったが、その候補が越前丸岡藩主有馬一準の子である

大三郎であった。大三郎の母は、重就の異母姉の秀であり、秀は長府藩主毛利匡広（重就の実父）と萩藩二代藩主綱広の娘である放光院との間に生まれた娘で、綱広から見れば孫にあたる。大三郎は、萩藩毛利家正統の血筋を引く存在であった。綱広につながるということは、輝元にもつながることになり、この養子は長府藩毛利家出身の吉元の相続によって秀元系へと入れかわった血筋を再度輝元系に戻すものであったと論じる。

大三郎を後継者とすることは重就の意志ではないうえに、家中内でも綱広の血脈ではあるものの、女系であることを問題視する声もあったが、最終的には宗広の遺志が尊重され、重就は大三郎（重広）を養子に迎えた。ただ、重就と大三郎の養子入りを強く主張した一門家臣などとの対立は、その後も続き、財政再建を目的におこなわれた宝暦の改革が実施されるまでの過程で顕著にあらわれたという。

五章では、八代藩主治親・九代藩主斉房期について論じる。章名にある「有力者」とは、田安家や松平定信のことである。田安家については、重就の世子治親（岩之允）と田安宗武の娘節姫との婚姻までの過程を説明するほか、重就が少将に昇進したこと、治親が家督相続前に侍従に任官したことの背景には田安家からの働きかけがあったと指摘している。田安宗武の子である老中松平定信も毛利家に出入りし、関係を深めていた。家中内部の対立もあり、結果的にはうまくいかなかったが、宇部福原家の古格復帰運動の時にも定信に内意を得ており、その関係が重視されていたことがうかがえる。

寛政三年（一七九一）六月、治親は急死し、幼年ではあったが、その

子の義二郎（斉房）が跡を継ぐことになった。萩藩毛利家を訪れていた定信は先例に従い、縁戚関係の大名家に斉房の後見役を依頼することを提案している。この時対応した当役の堅田就正は、定信に後見役を依頼したい考えがあつたようであるが、それはかなわなかつた。しかし、定信は幕府向きの対応、節姫にかかわる事柄についての世話役は引き受けるとし、後見役の人選もおこなっている。最終的には、治親の実弟である長府藩主の毛利匡芳が後見役となった。

もう一人、斉房の治世で影響力があつた人物に養母である邦媛院（節姫）をあげている。同人は、政治・財政問題、また萩藩毛利家内部の問題（斉房の縁談など）について様々なことを命じており、大きな影響力をもっていたという。

斉房の治世については、撫育方の運用方法の変化をあげている。撫育方本来の設置目的は、家臣や領民の「撫育」にあるとし、この時期に撫育方の財源を借銀返済、家中・地下の救済にあてたが、こうした負担軽減政策を実行した斉房は、家臣・領民にとって「名君」と評価されたという。

六章では、十代藩主斉熙と十二代藩主斉広期について論じる。斉熙の治世については、財政の危機的状況のなかで起きた家臣との対立事件、毛利家の先祖や遠祖の墓所調査の概要などを紹介している。そのほか、斉熙の跡を継ぎ子というかたちで継いだ斉元が後継者に選定されるまでの過程や、斉熙の子どもの縁談内容にもふれている。

斉広については、將軍徳川家斉の娘との縁組に注目している。この縁組の願書は、縁戚関係にあつた田安家による添削をうけたうえで作成・

提出された。その後、斉広と家斉の娘和姫との縁組は認められ、毛利家は大奥とつながりをもつことになった。和姫は、婚礼の翌年（文政十三年）には死去したが、その後も萩藩毛利家は大奥へ女使を遣わし、品々を献上することを願い出ており、内願運動を継続した。その結果、隠居した斉熙、藩主斉元、世子斉広が少将まで昇進したという。しかし、こうした内願運動の負担は直接財政問題へ影響を与えた。内願運動、和姫との縁組による出費などにより財政が悪化し、領民生活を苦しめた結果、防長大一揆がおきたと指摘する。

そのほか、この章では萩藩毛利家を支えた斉房の正室貞操院、斉熙の正室法鏡院、斉元の正室蓮谷院といった女性についても、具体的な動きを論じている。

七章では、十三代藩主敬親・十四代藩主定広期について論じる。敬親については、まず同人が相続するまでの過程、敬親の治世でおこなわれた天保の改革の概要を説明する。同改革では、元就以来の毛利家の古法への復古が目指された。次に、慶事として位置づけられた幕府からの鞍鐙の拝領について述べる。この拝領は異例のことで、敬親にこうしたものが与えられたのは相続以来の政治改革への出精に対する功労であると認識されていた。同時に、この拝領は先祖に対する孝養で、子孫に対する規範になるものと位置づけられていた。これに続く慶事として、従四位上、さらに異例の中将への昇進があつた。その際の幕府への内願の背景として、従来からの「御統柄」の論理のほかに、相模国の警備を担うことで生じた海防政策を担う家としての論理があつたことを指摘し、家臣・領民の士気高揚のため官位昇進を求めていると論じる。

敬親の養子となった徳山藩毛利家出身の驍尉、のちの定広については、その養子入りは元就治世への血統の復古として位置づけられていたこと、同人に求められていたのは敬親の「思召」の継承、同族関係に対する理解と先例にもとづいた行動であったことなどを指摘している。

最後にエピソードでは、これまで述べてきた近世大名としての毛利家についてまとめている。同家は、転封や大きな御家騒動がなく、他姓養子を迎えることがなく「家」を運営できたが、内実としては家中不和や大名の幼年での相続といった危機があり、その都度、縁戚関係にある者の協力をうけながら行動していたなどとまとめている。

二

本書は、萩藩毛利家における「家」の存続を目指す取り組みについて、その時々の政治的背景、同族関係などをふまえながら丁寧に論じている。毛利家について全く知識がない評者にも、同家の「家」を軸とした通史が理解できた。大名家の「家」が、様々な問題を抱えつつ存続していたことを具体的な事例を示しながら論じた点は本書の成果であろう。また、「家」の存続・運営を支えた者として、縁戚関係者や、毛利家の女性についても詳述している点も重要な視点であると感じた。評者の能力的限界から、本書全体をまとめ、その評価を述べることはできないので、以下では萩藩毛利家の一門六家とよばれた一門家臣について若干の感想を述べておきたい。

大名家の「御家」「家」の形成過程においては、一門家臣などの自

律性の高い重臣の「御家」への包摂が重要な意味をもっており、「御家」形成と家臣団（家中）形成は表裏一体の関係にあったとされる²。一門六家は、役職の就任を通じ、段階的に藩政に参与し、家臣としての性格を強めていったとあるが（四四頁）、これは萩藩毛利家の家臣団形成過程と関係するものなのか。関係あるとすれば、藩主が構想していた一門六家を含む家臣団とはどのようなものであったのか。

本書からは、萩藩毛利家が役職就任を通じて一門六家を家臣化し、各家の平準化をはかったが、それでも家の特徴は残り、時に由緒にもとづき意見を主張していたことがわかる。たとえば、由緒を理由に軍役以外の役を勤めないと主張し、加判役以外の職に就かなかった三丘宍戸家の事例が紹介されているが（四五頁）、これは藩主の意志とはいえども、それを反映できないほど一門の存在が大きいことを示す事例として理解しているのか。国元の家臣に相談なく、藩主重就の世子が決定したことを重大事案とし、宍戸広周・毛利元連（一門六家）が批判していること（八二頁）、藩主斉広が自身の養子の人選について加判役の毛利房謙（一門六家）らに意見を求めていること（一六〇頁）、加判役の毛利元美・当職の毛利元亮（一門六家）ら重臣が驍尉の養子入りにあたり同人へ訓戒を示していることから（一七九頁）、藩内における一門六家の存在は大きかったと思われるが、家政・藩政運営における発言力・影響力の強さは就いている役職で異なるのか。あるいは一門六家の席次や由緒などが関係するのだろうか。

これとも関連するが、本書では一門六家と萩藩毛利家との関係や、一門六家が就いた職（加判役・当職・当役）については簡単にふれられて

いるが、一門六家が藩政運営においてどのような役割を担ったのかなどは十分な説明がないと感じた。九代藩主斉房の治世が始まった頃には、国元の重臣が「江戸―国元の合議体制の徹底」(一二二頁)を求めたとあるが、一門六家を含む重臣が参加したであろう江戸・国元の合議体制、そこでの意思決定構造はどのようなものだったのか。一門六家を含む重臣層の職制、藩政運営上の役割をおさえ、萩藩毛利家の存続にかかわる具体的な対応をみていくことで、より「家」の内部構造、「家」の存続問題に対する動向などがクリアになるのではないだろうか。

以上、本書のねらいからは逸れてしまったが、評者の興味・関心に従い簡単に感想を述べた。ただ、大名家の「家」を考える際には、一門家臣などの重臣も重要な検討対象となることは間違いないだろう。それは、「家」をテーマとした本書に一門家臣が多く登場していることからわかる。概要の紹介、感想部分については、誤読、読みこぼし、的外れな指摘などがあると思うが、著者には何卒ご海容願いたい。本書は、萩藩毛利家の「家」を軸とした通史としてはもちろん、大名家の「家」研究としても読み応えがあるもので、分析視角を含め評者自身も大変勉強になった。多くの方にお勧めしたい。

註

(1) 根本みなみ『近世大名家における「家」と「御家」―萩毛利家と一門家臣―』(清文堂出版、二〇一八年)。

(2) 三宅正浩『近世大名家の政治秩序』(校倉書房、二〇一四年)。

(A5判、二〇八頁、吉川弘文館、二〇二三年六月二〇日発行、本体価